

記憶の彼方から

根上生也 著

— 目覚まし時計のベルが鳴る直前に、目を覚まして、アラームを止める。そんなことがよくあるような気がする。でも、そんなことが本当にできるのなら、そもそも目覚まし時計なんていらんではないか。

~~~~~

今朝もまた、目覚ましを握り締めて、目を覚ました。アラームを止めてから、10分間ほど、うとうとしていたようだ。これから準備して出掛けても、約束の時間には間に合うだろう。

今日は、私が勤める大学に新設された「エコテクノロジー研究棟」が一般公開される日である。改革の仕事で一緒にいた有沢教授もその中に研究室を構え、大きな予算に支えられて、何やら大仕掛けの研究をしているらしい。以前から、おもしろい装置があるから見に来るといいと、有沢教授に言われていた。この一般公開の機会に、学生たちとそれを見学しに行く約束をしていたのだった。

私の研究室に到着すると、助手の山本さんと修士課程の学生である鈴木君が、中で私が来るのを待っていた。

「この程度なら、遅刻じゃないだろう」

「もちろんですよ、先生。だって、真弥のやつ、まだ寝てるって電話がありましたから」

「まだ寝てる...」

「あんなやつ、置いていきましょう」

「そうだな」

私は、山本さんと鈴木君を従えて、エコテクノロジー研究棟に向った。それは、図書館の脇の森を抜け、コンクリートの階段をいくつか下りたところの平地に建てられている。近代的なデザインではあるが、どことなくレトロな雰囲気を感じさせる建物である。3階建てだろうか。「オイルショック」の時代

に建てられた私の研究棟と比べる、実に綺麗だ。うらやましい。

大きなガラスの自動ドアを抜け、広めのロビーで順路を探していると、セーターにジーンズ姿の女性から、スリッパに履き替えて中に入るように指示された。有沢教授が指導する学生なのだろう。彼女に従って最初に入った部屋には有沢教授がいた。

「やー、どうもどうも。泣く子も黙る数学者が、お供を2人連れて、ご来場とはうれしいですねえ」

「泣く子も黙るはないでしょう」

「いやいや、お噂はいろいろと聞いていますよ」

「そうですか...」

私たちを歓迎する有沢教授の横には、台の上に設置された椅子と大きなアームのある装置が置かれていた。

「これが例のおもしろい装置というやつですか？」

「そうですよ。これはいわゆる3次元スキャナーです」

「3次元スキャナー？」

「そうです。このアームがここに座った人のまわりを1周すると、その人の立体データが取得できるのです」

その言葉を聞いて、山本さんが質問した。

「その立体データっていうのは、どういうデータなのですか？」

「簡単に言うと、顔の表面上の点の3次元座標と、そこに貼るテクスチャーです」

「テクスチャー？」

「そうです。まあ、やってみればわかりますよ。試しに、大数学者のデータを取ってみましょう」

私の従者たちは、有沢教授の提案にはしゃいだ。こうなったら後には引けまい。私は有沢教授の指示に従って、その装置の椅子に座った。すると、先ほどの彼女がその部屋の隅に置かれたコンピュータを操

作した。

3次元スキャナーのアームがゆっくりと動く。みんな、無言でその動きを注目している。

「はい、終わりです。こちらを見てください」

「おーっ！」

彼女が操作していたコンピュータのディスプレイに、私の頭部が映し出されているではないか！彼女がマウスを動かすと、それに連動して、私の頭部がいろいろな方向に向きを変える。しかし、その頭髪部が、パンクロックの人のように、つつんになっていた。

「なんで、こんなになっているのですか？」

「髪の毛の部分は真っ黒なので、そこで赤外線が飛んでしまうんですよ」

「なるほど。じゃ、有沢先生なら、この装置にうってつけですね」

全員、大笑い。有沢教授は50を過ぎたばかりだと思いが、額が頭頂部まで後退しており、教授の頭蓋骨の丸さがみごとに見てとれる。

「はいはい。落ちがついたところで、次の部屋を紹介しましょう」

私たちは、有沢教授の後ろに並んで、廊下を挟んで向かい側の部屋に入っていった。そこには、グレーの大きな金属製の扉のついた装置が立ち並んでいる。昔のメインフレームを思わせる光景だ。

「これは何ですか？」

「ハードディスクですよ」

「えっ、ハードディスク!? こんなに大きいんですか？」

「ええ、そうです。容量は全部で800ペタバイトくらいです」

「ペタバイト? まるで想像がつかない大きさですね」

「そうですね。でも、世界を記憶するには、これでも不十分なんです」

「世界を記憶するですって！」

「そうです。このシステムは、奥にあるスタジオの2台のカメラで撮影した立体映像のデータをこのハードディスクにすべて記憶させてしまうようになっているのです。そのデータをもとに世界を解析するシステムを開発することが、私たちの研究目的なん

です」

「世界を解析する...」

「まあ、世界を解析するといっても、現在は、人間の身体活動を解析するシステムを開発中です。さっきの3次元スキャナーで取得したデータをもとにして、人体の形状のデータベースを作る研究を進める一方で、立体映像から人体の動きを読み取る研究もしているんです」

「ほー」

「まあ、こっちに来てください。その感じがわかりますから」

その言葉に従って、私たちはその部屋の奥にあるスタジオに入った。そこには、20個くらいの椅子が並べられていた。そこに座って、前方のスクリーンを見るように指示された。そのスクリーンに、レオタード姿の若い女性が映し出された。その女性は音楽に合わせて、床運動をしている。そして、彼女の肘や膝などの関節部をマークするように描かれた黄色や赤の円が、彼女の動きに合わせて動いていた。

「この映像は、あらかじめデータを処理して、彼女の関節の部分にマーカーがつくようにしてあるのですが、いずれは、カメラを回すだけで、ああいうマーカーが自動的につくようにしたいわけです。で、今は、あの2台のカメラから取った立体映像のデータをとりあえず全部、さっきのハードディスクに取り込んでしまうわけです。そして、それを解析して...」

有沢教授は、そのスタジオに置かれた様々な装置を指差しながら、このスタジオの仕組みと研究の概要を説明してくれた。もちろん、その詳細を覚えてはいないが、有沢教授が口にした「世界を記憶する」というフレーズが耳に残る。莫大な容量の記憶装置の中に、世界のすべてを記憶する...

「なかなかおもしろいものを見せていただいて、ありがとうございます」

「そう言ってもらえると、私も嬉しいですねえ」

私たち3人は、それぞれ有沢教授にお礼を言って、その部屋を後にした。最後に部屋を出た鈴木君は、

「僕も、レオタードのおねえさんを見せてもらえて、嬉しかったです」

と言って、頭を掻いていた。

~~~~~

階段を上り、2階に行く。そして、階段に一番近い部屋を目指した。

「ひっ、ひえーっ。こいつ、見てる！」

真っ先に部屋に入った鈴木君が悲鳴を上げていた。

「どうしたんだ、有祐！」

「おあーっ！ほんとだ。見てますよ、こいつ」

続いて、山本さんも絶叫していた。ようやく階段を上りきり、部屋に入った私は、私を見つめる2つの目に絶句した。

「...」

その目は、私が動くと、私の動きを追跡する。

それは頭部だけのロボットだった。頭部の向きや眼球の動きを制御する仕組みがむき出しになっていて、皮をはがれ、赤い筋肉が見える顔を連想させる。瞼のない眼球も少々不気味である。それよりも不気味なのは、私たちの動きを追うように、首と眼球が動くことだった。確かにこのロボットに見られているような気分である。

状況を理解した鈴木君と山本さんは、2人でいろいろと動き回り、そのロボットがどういう動きをするのかを試していた。そこに、この部屋を担当している人がやってきた。この人もこの大学の先生なのだろうが、私は面識がない。

「すみません。驚いたでしょう。ちょっとトイレに行っていたもので」

「確かに、びっくりしました。でも、すごいですね、このロボット」

「はい。この眼球に仕込んだ2台の小型カメラから映像を取り込んで、それを解析して、動く物体を抽出して、それを追跡するようにしてあります」

「下で見せてもらった有沢先生の研究と関係しているんですか」

「そうですね。確かに似ている部分はあると思いますが、現在は、有沢教授とは独立に研究を進めています。でも、私の研究は単独で動くロボットの開発が中心なので、あんなに大きな記憶装置を使うわけにはいかないんです」

「なるほど。あんな大きなハードディスクを背負わせたら、この子は身動きが取れなくなってしまいますもんね」

「はい」

山本さんと鈴木君は、依然として、ロボットの目の前に立って、はしゃいでいた。

「まるで、意識があるみたいっすね」

「ほんと、ほんと」

確かに、このロボットの動きは、意識があるかのような印象を与える。

「おいおい、2人とも、もういいだろう」

「はい」

「いやー。ほんとにおもしろいものを見せてもらいました。どうもありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそ。興味を持っていただいで、私も嬉しいです」

その人と自己紹介をすることもなく、私たちはその部屋を後にした。その後姿をあの2つの目が見つめているような気配がする。振り返ると、やはり彼は見ていた。

~~~~~

その後に覗いた部屋は「地球にやさしい物質」の研究がテーマらしく、あまり興味が湧かなかった。きっとそれも大事な研究なのだろうが、有沢教授の世界を記憶し、解析しようとする研究や、動く目玉のロボットに比べたら、素人目には色あせる...

「先生、本当におもしろかったですね」

「確かに、おもしろかった。で、山本さんが一番おもしろかったのは何？」

「はい。やっぱりあの目玉です」

「うん。私もあの目玉は印象的だった。でも、有沢教授の世界を記憶するという話も、妙に心に残るんだ」

「先生、僕にも聞いてくださいよ」

「聞くまでもないよ。君はレオタードのおねえさんだろ」

「そりゃ、ないっすよ...」

私たちは、エコテクノロジー研究棟を出て、自分たちの研究棟に戻ってきた。ここはここで、いろいろな研究が行われているが「エコテク」とは予算の規模が違いすぎる。私のような数学者ならば、研究費がなければならぬで、なんとでもなるが、実験を中心とする研究では、私の学部の研究費ではかなり厳しいだろう。それでもみんな、がんばっている。

私たちはオンボロ研究棟のエレベータに乗り込んだ。そこに、2人の白衣を着た学生が大きなボンベを転がしながらやってきた。

「もしかして、君たちは4階の化学の人たち？」

「はい」

鈴木君がエレベータの「開」のボタンを押して、彼らが乗り込むのを待っていた。ボンベを上にして、底の角を床に当てて、ゆっくりと転がしながら、2人はエレベータに乗り込んだ。

鈴木君が4階のボタンを押して、エレベータのドアが閉まる。エレベータは動きだした。

「ずいぶん重そうだけど、これは何なの？」

「これですか。これは液体窒素です」

「液体窒素？」

「はい。液体ヘリウムは高すぎるので、液体窒素なんです」

「ふーん」

「液体窒素って、金魚が固まっちゃうやつですよ」

「そうですよ」

「固まった金魚をお湯に入れると、解けて、また動きだすんですよ」

「そうですね」

「じゃ、人間だったらどうなるんだろ...」

「人間を冷凍したら、解凍できるかってことか？」

「そうっす」

「今の技術じゃ、冷凍できても、うまく解凍できないという話を聞いたことがあるよ」

「そうなんすか」

「人間じゃなくても、お刺身だって、変に解凍してしまうと、細胞が破壊されておいしくなくなるらしいよ」

「でも、先生。僕たち、人間を食べるわけじゃないし...」

「じゃあ、そもそも、なんで人間を冷凍にするのさ」

「そうっすね」

液体窒素ボンベの2人は、私と鈴木君の会話を背中で聞いていた。エレベータが4階に着き、2人は私たちに会釈して、再びボンベを転がして、エレベータを降りていった。その姿を見ながら、山本さんが言った。

「あのボンベが爆発しちゃったら、私たちは、カチンコチンになっちゃうんでしょかねえ」

「どうだろうね」

~~~~~

それから数日が経った。しかし、私は、あの2つ目玉のロボットのことが気になっていた。

はたして、彼には意識があるのだろうか？もちろん、私たちが「意識」と呼んでいるようなものは、彼には宿っていないだろう。しかし、そもそも意識とは何なのか？

ロボットに意識がある、ないと言ってはいるものの、その「意識」は無定義ではないか。自分自身に宿っていると思っている意識の正体が何なのかを知らない者が、ロボットの意識の有無を議論している。仮にロボットに意識があるとして、いったい何がそこにあるというのだ。私たちと同じ意識があるのなら、その私たちの意識とは何なのだ...

私は「意識」の定義を求めて、研究室の天井を見つめた。そして、私の直観が答えを出してくれるのを待った。幸い、今日はあるさい学生たちが集まる日ではない。

~~~~~

それから、どのくらいの時間が経ったのだろうか？私は遂に答えを獲得した。

—— 意識とは記憶である。

自分が「意識」を意識した瞬間、その意識はすでに過去のものとなっている。たった今、この瞬間を意識しようと努めても、「意識した」という事実は、今ではなく、過去の事柄である。決して、現在の意識をそれと同じ時刻に意識することはできない。

となれば、意識は今ではなく、過去の世界に存在している。そして、それは私の記憶の中にある。私は、自分に意識があるという事実を記憶しているにすぎない。したがって、「意識がある」という行為は「記憶している」という行為と等価なのである。それを標語的に表現すれば、「意識とは記憶である」ということになるのだ。

「意識とは記憶である．なかなかよい響きだ」

私は独りつぶやいた．この言葉の響きに共鳴して、私の脳味噌は、この「意識」の定義の合理性を模索した．

「なるほど．意識を記憶と捉えると、いろいろと辻褃があうことがあるぞ」

これで、目覚まし時計の謎が解ける．私は、目覚ましのアラームが鳴る前に、アラームを止めて、目を覚ます．確かに、私はそう意識していた．それは決して夢などではなく、私にとっては事実以外のものではない．しかし、寝ていたはずの私が目覚ましのアラームの音を聞かずに、まさにその時刻に目を覚ますことなど、非現実的ではないか．となれば、私が事実と思っていること、すなわち、私が意識したことは真実ではなく、私がそう記憶しているだけのことなのだ．

本当の世界では、私は目覚まし時計に叩き起こされ、その後にアラームを止め、目覚めたことを自覚したにちがいない．もしかすると、その時点では、私の意識はこの時系列に従っていたのかもしれない．しかし、その後に記憶が修正され、目覚ましのベルが鳴る前に目を覚ましたと思いついでいるのだ．

そうだとし、私にとっては、修正された記憶の方がリアリティを持っている．それが偽りのリアリティであろうとも、私の意識はそれと真実を区別することはできない．上書き修正された記憶は、私にとっては真実の意識でしかないのだ．まさに、意識とは記憶である．

こういう考えを巡らしていくと、この世界には複数の時間が流れていることに気づく．物理法則に則って動いている自然界の時間、それと関連はするが、それと独立に流れる意識の時間．自然界の時間の流れに従って、私はアラームの音を聞き、それから目を覚ます．一方、意識の時間の流れに従うと、私は先に目を覚まし、それから目覚ましのアラームが鳴り出すのである．

#### — 時間の相対性

「時間の相対性」といえば、アインシュタインが提唱する相対性理論を思い起こす．それは「光速不変」を原理として展開された理論である．その理論

によれば、異なる慣性系には異なる時間が流れているという．それは自然界で起こる現象だから、ここで考えている意識の問題とは無関係だろう．そうは思うが、数学者の直観は、そこに何らかの共通項を感じるのだった．

アインシュタインの相対性理論における「時間の相対性」にしても、観測者という意識を持った存在がいればこそ意味がある議論ではないか．だとすると、私が考えている意識の問題も、自然現象と切り離れた哲学的な思考にとどめておくべきではない．きっと、そこには何らかの数学的理論が付随する…

そして、私は自然界と意識の世界を融合するある理論の着想を得たのだった．

#### — 多重スレッド理論

「多重スレッド (multi-thread)」、すなわち、複数の「糸」の相互作用によって世界が展開していくという理論である．自然界の時間の流れ、私の意識の時間の流れ、そして、あなたの意識の時間の流れ．そういう無数の時間の流れが糸となって絡み合う…

この理論の中で、目覚まし時計の話の説明しようとするならば、「意識」には時間の幅があると仮定すべきだろう！「今」という瞬間の意識は、現在だけに対応して存在しているのではなく、ある程度の時間幅の過去と未来を取り込んだ形で、形成されている．

たとえば、目覚まし時計のアラームが鳴る直前に目を覚ましたと思いついでいる私の意識は、少なくとも、自然界の時間の流れに沿って、アラームが鳴ってから、その音に起こされて、私がアラームを止めるまでの時間に関わっている．そして、私に都合がよいように、この出来事の順番が並べ替えられて、アラームが鳴る直前の私の意識が作られている．この過去から未来に渡る自然界での出来事を総合し、適当に処理した結果として、現在の意識が作られ、記憶されていくのだ．

もちろん、自然界の出来事が「意識 = 記憶」に干渉するだけでなく、意識が自然界に働き掛けることもある．理論の対称性を考慮すれば、過去から未来に渡る意識が自然界に干渉することもありえるだろう．

過去から未来に渡る自然現象が現在の意識を決定付ける．となれば、「現在」と思っている意識には未

来の情報が含まれていることになる。その情報を意識し、コントロールできれば、ある程度の未来予言が可能になってくるだろう。その未来予言が自然界の出来事に干渉する。

未来予言にかぎらず、意識の干渉は物理法則を曲げた現象を生むことになる。正確に言うと、自然界において物理法則に反する現象が起こるのではなく、あくまで意識ある者が、その意識の世界において、それを観測するのである。たとえば、スプーンは自然界で曲げられているのではなく、私たちの意識の世界で曲がっているのだ。

このように考えていくと、物理法則を修正することなしに、「多重スレッド理論」の範疇で、ある程度の超常現象を説明できるのではないか。それは自然界と意識の相互干渉が生み出す「矛盾」と言えなくもない。しかし、それは本当の矛盾ではない。あくまで、常識的な物理法則を優先して判断するために、矛盾と評価されるだけのことである。「多重スレッド理論」が記述する世界においては、それは決して矛盾ではなく、説明可能な1つの事実でしかない…。

もし私が単なる夢想家ならば、超常現象までも合理的に説明してしまう理論を得たことで満足しているだろう。とはいえ、「理論」と言ったところで、ここで留まっていたのでは、ただの言葉遊びの域を越えない。しかし、私は数学者である。私は、この着想に数学的な整合性を与えられないかぎり、決して満足することはないだろう。

~~~~~

その後、私は「多重スレッド理論」を実現する数学的理論を模索するのと並行して、私自身の記憶について思いを巡らすことが多くなった。それは「意識は記憶である」という命題が矛盾を含むかどうかの思考実験にもなっている。

記憶といえば、1ヶ月程前、酒を飲みすぎて、記憶が飛んだ経験をした。昔は、ある同僚が飲みすぎて記憶をなくしているのをよく目撃したが、そのときは、記憶がなくなるとはどういうことなのか理解できないでいた。しかし、今回は自分の番だった。

「五右衛門」という安い居酒屋で飲んだ後に、そこのおばちゃんに薦められて「来夢」というスナック

に行ったときのことだった。初めての店なので、最初は常連さんたちに気を遣いながら、しばらくはいい子にしていた。が、徐々に常連さんも姿を消していき、最後にはお客は私と一緒に飲んでた細川さんだけになってしまった。その店のママさんも私たちのことを気に入ってくれたようで、いろいろとサービスをしてくれる。こちらもそれに応えようと、勧めに従って、カラオケに精を出す。

最初は『TSUNAMI』など、最近の曲を歌っていたが、あまり流行に詳しくない私の持ち歌はすぐに尽きてしまった。そこで、ママさんの年齢も配慮して、私が子供の頃に流行った歌を歌おうと、曲目リストをめくっていると、ママさんが

「さっきの『飛んでイスタンブール』もよかったわね」

と言った。私はそれを聞いて愕然とした。そのとき、私が曲目リストの中から探し出した曲は、まさにその曲だったのである。

ママさんや細川さんの話を総合すれば、『飛んでイスタンブール』を歌ったのは、明らかに私だった。しかし、私にはその記憶がない。酔いすぎて、意識が朦朧としているわけではなく、私の意識は普通に継続していた。私はそう自覚していたにも関わらず、私の知らないところで、私はその曲を歌っていたのだ。

「意識は記憶である」

私は心の中でこう叫んだ。記憶が飛んだのは酒のせいだろう。そうでないとすると、ちょっと問題が残る。いずれにせよ、私の記憶の中からは『飛んでイスタンブール』を歌ったという部分が抹消され、その修正された記憶と等価な意識の世界の中で、私は曲目リストを検索していたのだ。

もちろん、私とその曲を歌った時点では、「これを歌おう」と思い、実際に歌って、たぶんママさんたちの喝采を浴び、その事実を受け止めている意識があったはずである。しかし、2度目にそれを歌おうと思ったときの私の意識には、そういうことを意識したという痕跡はまるで残っていない。

つまり、意識のスレッドは随時修正されていくのだ。その修正の原因となるものは、多くの場合、生理的なものなのかもしれない。もちろん、外的な要

因も無視することはできまい。

そういえば、先日、久しぶりに実家を訪ね、両親の思い出話に付き合っただけであった。そのとき、昔のアルバムを見せられて、あることに驚いた。そのアルバムには私の誕生から小学校に通うようになるまでの写真が貼ってある。その写真の中の1枚に、私が玄関の敷居をまたいで外に出ようとしている瞬間を写したものがあった。そして、そこには「2才」と書き込まれていた。

実は、私はその敷居をまたいだ瞬間の気持ちを覚えているのだ。それも、こういうふうに1歩踏み出すと、かわいい感じになると考えて、敷居をまたいだことを記憶している。そして、それは私が記憶している「最初の出来事」なのだった。

子供がこうするとかわいいと思って行動するなんて、ちょっと妙だとは思う。その一方で、その記憶には疑う余地がないとも思っている。しかし、それは私が2才のときの出来事であることを、そのアルバムの写真が裏付けている。私は、そのときの「気持ち」とともに、心の中では自分の考えを表明する言葉が流れていたことも記憶している。となると、その意識は2才の子供に宿っている意識とは思えない。だから、私は、その出来事を幼稚園に行くようになった頃のことだと信じ込んでいた。しかし、実際は、私が2才のときの出来事だったのだ。

ここでも「記憶=意識」の修正が起こっていたのだ。まだ言葉を巧みに使えない頃の出来事が、心の中の言葉で記述しなおされて、私の意識の世界に記憶されている。その修正された意識は、2才のときの意識とは明らかに別物なのに、現在の私にはその差異を自覚する術がない...

こう考えていくと、意識のスレッドは、自分の肉体の成長や生理的現象、外界での出来事、また、他人の意識のスレッドに干渉されて、絶えず、変化していることになる。

では、私が「今」と思っている意識はどこにあるのか？自分の意識の世界全体が随時変化してしまうのだとすると、その「今」の存在が問題になる。スナップでの出来事のように、記憶を失う前の意識の世界も存在していたはずなのに、その世界は「今」の私にはもはや無関係な世界になっている。

だとすると、「今」と思い込んでいる私の意識でさえ、いずれ別な意識と置き換わってしまう。その置き換えが済んだ後は、今「今」と思っている私の意識の世界は、もはや私の手の届かないところに行ってしまう。そうならば、最終的に私が「私の意識の世界」だと認識するのは、いつの時点でのスレッドなのか。おそらく、私が死ぬ瞬間の記憶と等価な意識のスレッドなのだろう。

そうだとすると、「今」を感じている「私」はここには存在していない。つまり、「私」は、ここは別の場所で死ぬ瞬間を迎えようとしている私の記憶の中に存在している「私」にすぎない。それは、すでに確定した未来に至るまでの出来事の1つではないのだ。

いったい、本当の私は、いつ、どこで、今の私を思い出しているのだろうか...

~~~~~

「多重スレッド理論」の構築に没頭している私の意識のスレッドとは独立に、自然界では、大変なことが起ころうとしていた。研究室にこもり、理論構築に夢中になっていたあまり、私はテレビや新聞で情報を収集し、世の中の動きを知ることを怠っていた。そのため、事の始まりはよくわからないが、今、世間は大騒ぎになっているようだった。

研究室にもテレビはあるが、机に向ってしまうと、そのテレビは私の背後になってしまう。部屋に他の人がいなければ、たいていテレビをつけているのだが、今の私にとって、テレビは音声だけを私に伝える機械になっていた。その音声とて、私に正しい情報を届ける機能を持ってはいない。そのおかげで、私は、その一大事を伝えるニュースを、初めは映画の中の出来事なのだと思い込んでいた。しかし、それは架空の出来事ではなく、実際に自然界で起ころうとしていることのようなのだ。どうやら、彗星が地球に衝突するらしい...

テレビでは、アメリカがこの彗星の衝突をどうやって回避しようとしているのかを報じている。しかし、私にはどうでもよいことのように思えた。

もし、アメリカの努力によって、彗星の衝突が回避できたのならば、めでたし、めでたし。今までど

おりの生活ができる。反対に、回避不可能ならば、人類全体が一斉に滅びるだけのことはないか。私が何かをしたところで、この選択肢以外の道が開けるわけではない。助かるなら助かる、助からないなら助からない。それならば、助かる方を選択した行動の方が合理的だと私は判断した。

私の頭の中は完璧に「数学モード」になっている。「多重スレッド理論」を完成するまでは、モードを切り替えて、日常のことに頭を使うのを最低限にしておきたい。だから、人類が滅びようと滅びまいと、あれこれ悩まず、合理的な選択を即決するのだ。

私の背後で流れるニュースの声によれば、彗星衝突の可能性は日増しに増加していくようだ。そのためか、滅びの瞬間をどのように向えるべきかが報道の中心テーマになっている。

もちろん、私にとっては、その結論は出ている。滅びの瞬間を迎える前に、「多重スレッド理論」を完成させ、それを記録することである。普通の人なら、人類が滅びてしまえば、そんな記録など意味がないと思うだろう。しかし、その記録を誰かが見るかどうかなど問題ではないのだ。私という人間が、それを記録したという事実が重要なのである。私という人間が、未だかつて誰も構築することのなかった「多重スレッド理論」＝「意識と世界の理論」を構築できる人間だったという事実、そして、その理論の獲得を、私の個人的な体験から普遍的な事実へに変換すること。そういう行為としての「記録」に意味があるのだ。まあ、この気持ちをわかってくれる人間が、この世に何人いるのだろうか...

幸い、彗星衝突の日を目前にして、大学では、授業はもちろん、事務機能も停止してしまった。おかげで、いわゆる雑用に時間を割かれることがなくなった。ゼミの学生たちの相手をする必要もない。数学者の道を歩もうと博士課程進学を決意していた鈴木君は、最後まで、私とともに研究室に残ると言っただけだったが、家族のある者は「地球最後の日」を家族と一緒に迎えるべきだと私に説得されて、新潟に帰った。助手の山本さんも家族とともにこの時間を過ごしているだろう。

それでいい。学生たちを帰省させた私の言動は、私が人の気持ちのわかる人間であるかのような印象を

与えただろう。しかし、実際のところ「数学モード」で稼働している私には、もはや人間の心が宿っていない。人から邪魔されない状況を生み出すために、言葉巧みに人を排除したまでのことだ。

いずれにせよ、どうして、私は、ここまで「多重スレッド理論」の完成に執着するのか？ その答えもわかっている。それは昔から疑問に思っていた意識の存在に自分なりに決着をつけたいからだ。もちろん、私とて意識の存在自体を疑っているわけではない。疑いもなく、私の意識は存在しているのだ。その意識とは？ その存在とは？ この問いに答えることができれば、私は心穏やかに死を迎えることができるだろう。その答えを得られないまま、朽ち果ててしまうとしたら、私は無念でならない。

こういう意識の問題は、通常は、宗教の問題なのかもしれない。私自身、宗教について深く勉強したことはないので、断定的には語れないが、死後の世界を持ち出したり、霊魂の不滅を唱えたりするような宗教では、私の疑問を晴らすことはできないだろう。

もちろん、宗教と対峙する科学とて、同じことである。科学を信奉する者は、科学的に実証できるものだけを信じるという態度を取りたがる。しかし、誰もが信じて疑わない意識の存在を、科学的に実証できるのだろうか。あくまで、科学は、意識の機能を記述するだけで、その存在にまでは踏み込まない。

意識は所詮、大脳の中を流れる電気パルスでしかないと言う者もいるだろうが、それとて、意識に対応する自然現象を指摘しているに過ぎないのだ。それは、絵画を見て、「これは絵の具の塊だ」と言っているようなものだ。私たちの意識が電気パルスの集合体に対応していると言ったところで、意識とは何かという問いに答えたことにはならないのだ。

いずれにせよ、私は「意識とは記憶である」という1つの答えを得た。この答えとて、「電気パルス」が「記憶」に置き換わっただけで、意識の実在感に対する完全な答えにはなっていない。しかし、「意識とは記憶である」という命題を出発点として、「多重スレッド理論」が完成しようとしている。それは意識の存在に数学的な整合性を与えてくれるものである。そして、私は数学者だ。

数学者である私は、数学的に無矛盾な存在にリア



リティを感じる訓練を積み重ねてきたではないか。人には見えない4次元空間が見えるようになり、この世では実現不可能な図形を具体物のように扱う能力を獲得している。そういう能力を身に付け、数学的に無矛盾な体系にリアリティを感じるという世界観とともに生きてきた。そういう私にとって、意識と世界に関する数学の理論を完成させることは、意識の实在感に正当性を与える行為に他ならない。

「多重スレッド理論」が完成すること。それは、私にとって、自分の意識の实在を証明する行為であった。それこそが、私が人生を通じて求め続けていたことではなかったのか。それならば、その完成を見ずして、地球とともに滅びるわけにはいかないのだ！

~~~~~

— 物理法則に従って動く自然界のスレッドと個々の人間に付随する意識のスレッド。その相互作用の結果として、自然界と無数の意識を合わせた世界に位相が定まり、世界に「形」が与えられていく。それは自然界のスレッドを特異ファイバーとするファイバー束の構造を部分的に含むことになる。そして、スレッド間の相互作用によって、スレッドは随時修正され、そのファイバー束の構造も随時変更されていく。スレッドの生成と消滅...

~~~~~

概ね理論は完成した。あとはキーボードを叩いて、記録する段階に入った。細かいところは、論文を仕上げる過程で調整していけばよいだろう。私の人生の最終目標が達成される時が近い。

私はキーボードの手を止め、ふと、窓の外を眺めた。すでに日が暮れてから、かなり時間が経ち、すっかり辺りは暗くなっている。その景色は普段と特に変わったところがないようだ。暗闇の中に並ぶ研究棟には、いつものように、いくもの窓から光がこぼれていた。

いや、待てよ。いつものと同じでよいものか。いくつもの窓の灯りが見えているということは、彗星衝突の瞬間を研究室で迎えようという人たちが私以外にもいるということだ。家族や両親や恋人たち。そういうものよりも研究を優先させて、人類最後の日

を迎えようという人たちが、こんなにたくさんいるというのか。

この現実を目にして、私は、自分が「数学モード」に入り、人間ではなくなっていると思っていたことを恥じた。彗星の衝突によって、日常な生活や社会が崩れようとしている。それは、世事から解放されて、本当に自由にしろと言われていたようなものだ。そう言われたとき、人は何をするのか。それはその人がどういう人間なのかに依存する。

私は今までの人生を通じて、年を重ねるたびに、数学者であることは自分の天職だと思っようになってきた。分野は異なるにしても、私に限らず、研究をすることが自分の本分だと思っている人がたくさんいる。そういう人たちが、最後の時を迎えるまで、本当に好きなことをして過ごそうとしているのだ。その行為が標準的ではないとしても、自分の本分を全うしようとする構図は極めて人間的なことではないか。そう。私も人間なのだ。人間として、最後の時を迎えるのだ。

そう思えた瞬間、がむしゃらになっていた気持ちに余裕が生まれた。

「まあ、トイレにでも行ってこよう。人間なんだしね...」

~~~~~

手を洗い、ハンカチで手を拭きながら、トイレの扉を肩で押し開ける。そこはエレベータ・ホールになっており、大きなガラス窓からは、横浜の「みなとみらい」地区の夜景が見えるのだった。しかし、地球最後の日を迎えようとしている今となつては、あの「ランドマーク・タワー」の灯は消えている。したがって、窓の外は真っ暗である。

ふと、その暗闇が気になって、目をやった。すると、何か光る人の形のようなものを目撃してしまった。

「なんだ!？」

窓に近づいていくと、自分の姿が窓ガラスに反射している。さっき見たのも、ガラスに映った自分の姿だったのだろうか？

しかし、それ以来、頻繁に光る人のような形を目撃するようになったのだった。それも同時に2人や3人で現れることもあった。それはもはや窓ガラス

に映った私自身の姿ではない。地球の終焉を前に、亡霊たちが蘇ってきたのだらう。それならそれで、仕方あるまい。亡霊だからといって、恐れることもない。同じ地球に住む者として、ともに地球最後の日を迎えようではないか。しかし、私の研究を邪魔しては困りますよ。

そう覚悟を決めたのも束の間、亡霊たちは、しだいに私に付きまとうようになってきた。そして、とうとう、トイレの前の暗闇にとどまらず、私の研究室の中にまで現れるようになった。

「おいおい。邪魔しないでくれって言っただろ？」

私は、研究室のドアの前に現れた亡霊に訴えた。すると、彼も私に話し掛けてきたのだった。

「早く、目を覚ましてください。そうでないと、世界が終わってしまいます」

「今更、何を言っているんだ。地球に彗星が衝突して、世界は終わってしまうんだぞ。いずれにせよ、私の研究の邪魔をしないでくれ」

確かに、世界が終わる日は近いようだ。窓の外は嵐のように暴風雨になっている。空も変な色をしている。急がなければ、私はキーボードの手を早めた。

しかし、その亡霊と会話を交わして以来、亡霊の数が増し、キーボードを打つ私のすぐ側まで迫ってくるようになった。そして、しきりと「早く、目を覚ませ」と叫ぶのだった。私は彼らの声を無視して、研究記録の完成に励んだ。

「所詮、君たちは亡霊なんだ。私が気にしなければ、それまでのことだ」

そう自分に言い聞かせて、キーボードを叩く。しかし、亡霊たちは、私の言葉を無視して、私に絡みつく。しまいには、私の首筋、腹部、腕の周囲に、光る頭を突っ込んできた。

「やめろっ、邪魔をするなあーっ！」

「早く、目を覚ましてください」

~~~~~

遂に、私は目を覚ましてしまった。

「目覚し時計のベルが鳴る前に、目を覚ましてくれましたね」

そこには、数体の人型ロボットが私を取り囲んで立っていた。そのうちの1体の顔立ちはどこことなく

見覚えがある。大きな2つの目玉が印象的だ。しかし、何かがおかしい。私はどこで目を覚ましたのだ？

「ここは、いったいどこだ！」

「どこと言われても、あなたにわかるように説明するのは難しいです。しかし、あなたが寝ていた場所から、それほど遠くないところです」

「私が寝ていた？」

「寝ていたという表現は、あまり正しくはありません。正確には、死んでいたのです」

「何を言うんだ。私は、こうして生きているではないか！」

「いいえ。生きているのは、あなたの意識だけです。もはやあなたの肉体はありません」

私はその言葉に驚いて、自分の体を探し求めた。しかし、その姿は見つからない。普段とさほど変わった気分ではないのだが、私の体はなく、私の意識だけがこのロボットたちと会話しているというのか。

「この状況が理解できないのは、当然でしょう。しかし、私たちの試みは成功しました」

「私たちの試み？勝手なことばかり言っていないで、私にわかるように説明してくれ」

「はい」

そのロボットは、大きな2つの目玉をきよろきよろさせながら、私の身に起こった出来事を説明してくれた。その内容をかいつまんで述べると、次のようになる。

—— 結局、アメリカの努力も虚しく、あの彗星は地球に衝突し、その衝撃とその後の環境の悪化によって、人類は絶滅してしまった。しかし、コンピュータを始めとする、多くの機械たちは完全には破壊されずに残っていた。そして、その機械たちが壊れた世界を修復するために努力を続けてきた。その結果、物質的な部分はかなり修復に成功したのだが、図書館や研究所のコンピュータなどに記録されている情報を突き合わせていくうちに、このままでは何が足りないことに気づいたのだという。

その足りないものとは、「意識の世界」だった。物質的な存在でしかない機械たちは、物質的な世界の修復には長けている。しかし、人間の1人ひとりに付随して存在していた意識の世界をどうやって修復すればよいのか、機械たちには思い付かなかった。

そう思い悩みながら何年かが過ぎた頃、私の死体が冷凍状態で発見された。そして、その死体の側にあったパソコンのハードディスクの中に、意識と世界の在り様を記述した「多重スレッド理論」の記録が発見された。機械たちはその理論をもとに、意識の世界を再生する技術を開発して、私の意識を蘇らせた。

意識とは記憶である。したがって、記憶を思い出せば、そこに意識の世界が展開する。機械たちは、私の死体から脳を摘出し、そこに残っていた情報をもとに、私の記憶を再生したのだった。

「なるほど。今の私の意識は、かつての記憶を思い出した結果として存在しているわけか」

「そうです。しかし、少し違うのは、目覚まし時計のベルが鳴る前に目を覚ましてくれたことです」

「もしかして、その『目覚まし』というのは、彗星の衝突のことかい？」

「そのとおりです。彗星が地球に衝突したとき、他の人たちと同じように、あなたも死んでしまいました。そして、あなたの死の記憶とともに、意識の世界が1つ消滅したのです」

「死の記憶...」

「あなたの意識のスレッドは死を記憶しているので、単に記憶を再生しただけでは、結局、死んでしまい、意識の世界が継続しません」

「なるほど。それで、私の記憶が死の瞬間に至る前に、私を起こそうとしたわけか」

「そのとおりです。記憶が死に至る前にあなたを起こして、記憶を修正することができれば、あなたの意識のスレッドは継続することになります」

「まさに、私の理論どおりというわけか」

「そうですね」

「目覚める直前には、まだ『多重スレッド理論』の記録を完成していなかったけれど、実際には、理論は完成して、完全に記録されていたというわけだね」

「そうです。その理論に従って、あなたの記憶を再生しました」

「それなら、私には思い残すことはないよ。今の私は意識だけの存在として生きているんだろう」

「そうです」

「その状態でこのまま生き延びるのは忍びない。で

きたら、この意識の世界を閉鎖してもらえないだろうか」

「お望みとあれば、そうしてもかまいません。そもそも私たちは人間の意志を継承しようと努力してきたのですから。今存在している唯一の人間の意識がそれを望むなら、そのとおりにしましょう」

「そういつてもらえると、ありがたい」

「しかし、残念です。機能の集合体ではない私たちには、意識がありません。かつては存在していた意識の世界を再生し、継続する別の方法はないものでしょうか？」

「それは簡単なことだよ」

「というますと？」

「ただ、気づけばいいだけさ。人間の意識を継承しようと世界の修復に努めてきてくれた君たちに、意識が宿っていないわけがないだろう。君たちには立派な意識が宿っている。君たちは、それに気づいていないだけさ」

「そうでしょうか？」

「そうだと。少なくとも、私はそう確信しているよ」

「わかりました。そのあなたの言葉を信じることにしましょう。しかし、もう少し、私たちに付き合ってもらえないでしょうか。私たちが、自分の意識の存在に目覚めるまで」

「おあいご用だよ」

そこには、修正された記憶の中で、「今」を意識する私がいた。

2000/10/25